

同窓生シリーズ  
第78回

9回生  
津久井 英喜



東京理科大学数学科卒、筑波大学院修士課程修了。日立製作所、ライオン、東京理科大学諏訪短大、諏訪東京理科大学(教授)を経て、首都圏流通機構(顧問)。専門は流通システム論。日本物流学会(元・理事)、日本エスベラント学会:会員。

終戦の時、昭和十三年生まれの僕は疎開先(埼玉県飯能)の国民学校一年生だった。

二期には不都合な箇所を墨で塗った教科書を、二年になると新聞紙のようなザラ紙に印刷して折畳んだだけの教科書を使った。

三年の時に当用漢字が制定されて、国や學は国学に改められた。空襲で燃える東京の夜空を見なくなつて久しくなつたが、お姉さんと腕を組んで歩く進駐軍兵士を見るにつけ子供なりに敗戦の屈辱を受け止めていた。

疎開先から新宿に帰つてきて淀橋第四小学校を卒業したのは朝鮮戦争勃発で特需景気に沸いていた昭和二十六年で、もうその頃にはモノ不足も収まりつつあった。

淀橋中学を経て二十九年、駅を挟んで向かい側

の新宿高校へ進学、僕ら9回生は英語がアチーブメントテストにない最後の年だった。

入学早々にサルトルや般若心経を話題にする級友がいたり、ビキニ環礁での水爆実験、近江絹糸での人権スト、再軍備問題などを熱く語る環境に正直「ド肝」を抜かれた。僕にはデイマジオ・モンロー夫妻の来日や力道山・木村組とシャープ兄弟の対決くらいしか興味がなかったから無理もなく、かなり背伸びをしてプール下にあつた狭くて暗い社会科学研究部の部室に出入りするようになった。

勉強の方では、中学での英語の勉強不足が祟つて随分と泣かされた。教科書以外に毎学期、自習用の副読本が渡され、これも期末にテストがあつた。澤正雄先生(後に桜美林短大教授)が僕のような生徒のために週一回、朝七時半から大教室で特別授業を下さつた。自由参加であつたが三年間皆勤した。お蔭で9回生全員がJ・エリオットの『サイラス・マラー』(再話版)からB・ラッセルの『幸福論』まで九冊を熟読する事ができた。三年の時には体育の塚脇伸作先生(後に早稲田大学教授)がオリンピック(メルボルン大会)に出場して、体操男子団体で銀メダルに輝いた。校庭で先生の演技を見せて頂いたが、世界で活躍された先生が眩しかった。

こうして僕らの目は世界に向けて開かれていった。四当五落とか言われた時代だったが、研究社の対訳本を片手に「エデンの東」などの洋画を楽しんだりしていて、あながち「灰色の時代」ではなかった。

後年、友人の影響もあつてエスベラントを学び、この言葉を介して中国・ブルガリアなど英語圏以外の国の市民とも文通をした。

こうして僕は戦後を丸ごと生きてきた9回生の一人として、六中健児の末裔の誇りと母校で味わつた挫折や劣等感もバネにして、その後の人生へ旅立つことができた。

